

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2023 年度

# 北海道千歳リハビリテーション大学 一般選抜試験（A日程）

必修科目

## 国語総合

### 注意事項

- 1 文字や記号は明確に判読できるよう丁寧に記入しなさい。
- 2 この問題冊子は、10 ページあります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 問題用紙の余白等は適宜利用してかまいません。
- 4 問題冊子は最後に回収します。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、①から⑩の番号は各段落の通し番号である。

二

①このような人間を、子路は見たことがない。①力千鈞ちきんの鼎かなえを上げる勇者を彼は見たことがある。②明千里めいせんりの外そとを察する智者の話も聞いたことがある。しかし、孔子にあるものは、決してそんな怪物めいた異常さではない。ただもつと常識的な完成にすぎないのである。知情意のおのから肉体的の諸能力に至るまで、実に平凡に、しかし実に伸び伸びと発達したみごとさである。一つ一つの能力の優秀さが全然目だたないほど、過不足なく**a**キンコウのとれた豊かさは、子路にとってまさしくはじめて見るところのものであった。③闊達自在かつたつじざい、いささかの道学者臭もないのに子路は驚く。この人は苦勞人だなど子路は感じた。おかしいことに、子路の誇る武芸や④臂力りよりよくにおいてさえ孔子のほうが上なのである。ただそれを平生用いないだけのことだ。俠者子路はまずこの点で度肝を抜かれた。ア放蕩無頼ほうとうむらいの生活にも経験があるのではないかと思われるくらい、あらゆる人間への鋭い心理的**b**ドウサツがある。そういう一面から、また一方、きわめて高く汚れないその理想主義に至るまでの幅の広さを考えると、子路はウーンと心の底からうならずにはいられない。とにかく、この人はどこへ持って行っても大丈夫な人だ。A潔癖けつぺきな倫理的な見方からしても大丈夫だし、もつとも世俗的な意味からいっても大丈夫だ。子路が今までであった人間の偉さは、どれも皆その利用価値の中にあつた。これこれの役に立つから偉いというにすぎない。孔子の場合は全然違ふ。ただそこに孔子という人間が存在するというだけで十分なのだ。少なくとも子路には、そう思えた。彼はすっかり心酔してしまった。門にはいつてまだ一月ならずして、もはや、この精神的支柱から離れ得ない自分を感じていた。

②後年の孔子の長い放浪かんくの艱苦かんくを通じて、子路ほど⑤欣然きんぜんとして従った者はない。それは、孔子の弟子たることよって仕官みちの途をもとめようとするのではなく、また、B滑稽わげきなことに、師のそばにあって己の才徳を磨こうとするのでさえなかった。死に至るまでかわらなかつた極端に求むるところのない純粹な敬愛の情だけが、この男を師のそばに引き留めたのである。かつて長剣を手離せなかつたように、子路は今は何としてもこの人から離れられなくなつていた。

(注釈) ①とても重たい銅の食器を上げる ②千里の先まで見通すことができる眼力 ③物事にこだわらず、こせつかないこと

④体のもととなる力 ⑤喜んで

③その時、四十而不惑といった、その四十歳に孔子はまだ達していなかった。子路よりわずか九歳の年長にすぎないのだが、子路はその年齢の差をほとんど無限の距離に感じていた。

④孔子は孔子で、この弟子のきわ立つた馴らしがたさに驚いている。単に勇を好むとか、**キヲ**とかいうならば幾らでも類はあるが、この弟子ほどものの形を軽蔑する男も珍しい。究極は精神に帰すると云いじよう、**イ礼なるものはすべて形からはいらねばならぬ**のに、子路という男は、その形からはいって行くという筋道を容易に受けつけないのである。「礼と言ひ礼と言う。玉帛を言わんや。楽と言ひ楽と言う。どう鼓を言わんや。」などと言うと大いに喜んで聞いているが、曲礼の細則を説く段になるとわかにつまらなそうな顔をする。形式主義への、この本能的忌避と闘ってこの男に礼楽を教えるのは、孔子にとってもなかなかの難事業であった。が、それ以上に、これを習うことが子路にとつての難事業であった。子路が頼るのは孔子という人間の厚みだけである。その厚みが、日常の区々たる**細行**の集積であるとは、子路にはかんがえられない。本があつてはじめて末が生ずるのだと彼は言う。しかしその本をいかにして養うかについての実際的な考慮が足りないとして、いつも孔子に叱られるのである。彼が孔子に心服するのは一つのこと。彼が孔子の感化をただちに受け付けたかどうかは、また別の事に属する。

⑤上智と下愚は移りがたいと言つた時、孔子は子路のことを考えに入れていなかった。欠点だらけではあつても、子路を下愚とは孔子も考へない。孔子はこの**剽悍**な弟子の**無類の美点**を誰よりも高く買っている。それはこの男の純粹な没利害性のことだ。この種の美しさは、この国の人々の間にあつてはあまりにもまれなので、子路のこの傾向は、孔子以外の誰からも徳としては認められない。むしろ一種の不可解な愚かさとして映るにすぎないのである。しかし、子路の勇も政治的**才幹**も、この珍しい愚かさ比べれば、ものの数でないことを、孔子だけはよく知っていた。

(注釈) ①やみやかな ②荒々しくて、すばしっこい ③つでまま。任にたえる技量

⑥師の言に従つて己を抑え、とにもかくにも形につこうとしたのは、**エ親に対する態度**においてであつた。孔子の門にはいつて以来、乱暴者の子路が急に親孝行になつたという親戚じゅうの評判である。ほめられて子路は変な気がした。親孝行どころか、嘘ばかりついているような気がして仕方がないからである。わがままを言つて親を手こずらせていたころのほうが、どう考えても正直だつたのだ。今の自分の**C偽りに喜ば**されている親たちが少々情けなくも思われる。こまかい心理分析家ではないけれども、きわめて正直な人間だつたので、こんな事にも気が付くのである。ずっと後年になつて、ある時突然、親の老いたことに気がつき、己の幼かつたころの両親の元気な姿を思い出したら、急に涙が出て来た。その時以来、子路の親孝行は無類の献身的なものとなるのだが、とにかく、それまでの彼のにわか孝行はこんな具合であつた。

(途中省略)

## 五

⑦弟子の中で子路ほど孔子に叱られるものはない。子路ほど遠慮なく師に反問する者もない。「請う。古の道ですてて由の意を行わん。可ならんか」などと、叱られるに決まつている事を聴いてみたり、孔子に面と向かつてずけずけと「これあるかな。子の迂なるや！」などと言つてのける人間はほかに誰もいない。それでいて、また、子路ほど**才全身的に孔子によりかかっている者**もないのである。どしどし問い返すのは、心から納得できないものを表面だけ諾うことのできぬ性分だからだ。また、他の弟子のように、嗤われまい叱られまいと気をつかわないからである。

⑧子路が他のところではあくまで人の下風に立つを**D潔し**としない①**独立不羈**の男であり、②**一諾千金**の快男兒であるだけに、③**碌々たる**本弟子然として孔子の前に侍っている姿は、人々に確かに奇異な感じを与えた。事実、彼には、孔子の前にいる時だけは複雑な思索や重要な判断はいつさい師に任せてしまつて自分は安心してきつているような滑稽な傾向もないではない。母親の前では自分に出来る事までも、してもらっている幼児と同じような具合である。退いて考えてみて、自ら苦笑することがあるくらいだ。

(注釈) ①他に従属せず、束縛を受けないこと ②一度承知した言葉には千金もかえがたい価値があること ③何事もできないさま

⑨だが、これほどの師にもなお触れることを許さぬ**力胸中の奥所**がある。ここばかりは**dユズ**れないというぎりぎり結着のところだ。

⑩すなわち、子路にとつて、この世に一つの大事なものがある。そのものの前には死生も論ずるに足りず、いわんや、**㊦**々たる**利害**のごとき、問題にはならない。俠といえばやや軽すぎる。信といい義というのと、どうも道学者流で自由な躍動の気にかける憾みがある。そんな名前はどうでもいい。子路にとつて、それは快感の一種のようなものである。とにかく、その感じられるものが善きことであり、それの伴わないものが悪しきことだ。きわめてはつきりしていて、いまだかつてこれに疑いを感じたことはない。

(注釈) ㊦小さな

※表記補正 (中島 敦「弟子」昭和十八年)

問一 AからDまでの傍線―の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 aからdまでの傍線―のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 ①の段落中の傍線―アの意味についてふさわしいものを枠内のイ〜ニから一つ選び、その記号を書きなさい。

- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| イ 自由にふるまい、頼るものを持たないこと | ロ きまりを無視して、勝手に行動すること |
| ハ 酒や遊びにおぼれ、品行が良くないこと  | ニ わがままで何もしないこと       |

問四 ①の段落中の傍線―アのように、四つの漢字で作られたことわざやある意味を表す言葉を何と言うか。漢字で書きなさい。

問五 ①の段落中で、子路が孔子に出会ってから、子路の心の中で孔子はどのような存在になったか。本文からその言葉を抜き出しなさい。

問六 ②の段落において、子路が死ぬまで孔子に対し持ち続けてきた気持ちを本文中から語句の形で抜き出しなさい。

問七 ④の段落中の傍線―イについて、このことをある言葉で置き換えているが、その言葉を本文中から抜き出しなさい。

問八 ⑤の段落中の傍線―ウについて、孔子の評価とは異なり、他からはどう思われていたのか。それを示す語句を本文中から抜き出しなさい。

問九 ⑥の段落中の傍線―エはどのような内容に変わったのか。それを表した語句を本文中から抜き出しなさい。

問十 ⑦の段落中の傍線―オについて、その態度を比喻でたとえている文を⑧の段落中から選び、その最初の六字を抜き出しなさい。

問十一 ⑨の段落中の傍線―カについて、それは子路にとってどういうものなのか。⑩の段落中から、十五字以内の語句で抜き出しなさい。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、冒頭の語句は見出しである。

(ア) を考える

リハビリに打ち込む生活が続いている中、障害で歩くことも物をつかむこともできなくなった私は、しかし、それでも自分の人間としての大切な何かはまだほかにもあるのではないかと、たとえ米一粒分でも前進しようという気持ちの中でそう思っていました。なんとか自分の自分を保持しこの先さらに生きていくために私はすでに「価値観を変える」という作業を終えています。しかし、いまある価値観をさらにもう一度ギアチェンジすれば、もう一度人生を組み立て直せ、さらなる前進ができるのではないかと考えるようになっていました。そして、そのことがとても重要なことではないのだろうか。

イそんなことを考える日々が続いていたある日、リハビリが終わったその日の午後、私はこのことを雑談的にリハビリスタッフに話してみました。するとそのスタッフは、

「それは『障害の受容』と言うんじゃないですかねえ」

『障害の受容』・・・ですか」

初めて聞く言葉でした。障害者に対してどのような意味を持つのか、それはよい意味の、例えば障害者としての精神的な落ち着き感みたいな響きにも聞こえるし、障害を受け入れてしまった障害者はゆえに自らの前進をやめてしまっているという意味であるかもしれないとか、無知の中で考えあぐんでいました。しかし、話を聞いているとそれはとても重要な現象や考え方なのだ、そんな意味合いのことをリハビリスタッフの方は言っていました。それからしばらくして、いつも通り平行棒でリハビリをしていると医師が来て色々立ち話をした最後に、「ところで池ノ上さんは障害の受容とかについてはどのように考えておられますか？」

と尋ねられました。以前その言葉を聞いたとき、よくは理解できなかったのですが、その当時リハビリスタッフと話している中でそれはどうやら障害からくる失意や絶望感、自信の持てない自分の将来に対する不安や恐怖感が何かの作用で少しずつやわらぎ始めた精神状態にな

っていること、そして少し精神的に前向きの状態にあることかなと勝手に解釈していた私は、

「適切な答えになっていないのかもかもしれませんが、外来リハビリで何年も私と同じようにがんばってきた **aカンジヤ**さんが二人いて両方も私より四、五歳年上の方で、その方たちはリハビリを終えた後、必ず「だめだ」「悔しい」「行ったり来たりだ」なんて後ろ向きな発言ばかりをされる。それを聞いた私はいつも「それでもがんばりましょうよ、ぼちぼちでも」と言うのですが、また半面ですごくガツカリしてしまうんです。まだそんな精神状態にいるんだなあ、って。その部分はもう抜け出し、さらに次の段階に行ってほしいなあ、って。そうでなきや、お互いつらい時期が長すぎますものね。障害の受容って、そうやって自分の精神状態が少しずつ楽になり、少し自分に自信がつくようなことを指すのじゃないですかねえ」

そう答えると、医師は続いて、

「じゃあ逆に、そんなことはないのかもしれませんが、**ウ障害を負って何かいいことか感じたことなどありませんか？**」

と尋ねられました。実は私にはそう感じる部分が少なからずありました。それが「いいこと」だと言い切ってしまうほどの自信はないのですが、現役で社会人生活を送っていた頃の私は自分の夢を追いかけ、また自分を「物」と思い、自分に付加価値をつけねばとひたすら人生を突っ走っていきました。もちろんそれを否定などするものではありませんが、しかし、それがゆえに大切なこと、例えば人間としてどうあるべきかなど本質的な部分で考える時間はほとんど割いてきませんでした。商業的な利害関係で人間関係を保っていましたから、やさしい言葉を使った心通わせるような会話とか相手を思いやる気持ちとか、そんな人間的でやわらかな温かみのある感情など感じたり考えたりする **bヨユウ** などなかったというのが現状でした。また、**cフクシ** 関係の方とも親しくなっているいろいろな会話をする中で、それは自分が恥ずかしくなるほど欠落した部分だということを深く認識させられたものでした。一日二十四時間という時間の使い方もそうでした。自分の時間でありながら、結局は何一つ自分勝手に使えない二十四時間でもありました。それが全部自分のために使えるわけで、そんな時間からのスッキリした精神的な開放感を感じたことを今でも思い出します。そんな旨の話をする、医師が、

「池ノさんに見せたい資料があるので、ちょっと読んでみませんか？」

私がぜひにとお願いすると医師はさっそく資料を持ってきました。冊子を開くと、そこには「障害の受容」に関する各分野の先生方の意



見が「記事」としてdクイサイされていました。障害を負い心の整理も覚悟もできないまま、苦しみのスパイラルから抜け出せず苦しむ障害者の心理の移り変わりが見事なまで見抜かれていました。読み進んでいくと、私はある記事に目をとめさせられました。それはピラミッド状の図で三分野に区切っていました。一番底辺部が身体的次元で、真ん中が心理・社会的次元、最上は実存的次元とありました。はじめて聞く難しい言葉ですが、解説を読んでいくとE最上の部分に到達してはじめて障害の受容ができた状態に相当するであろうと結ばれていました。一番底辺の部分は面積も大きく、つまりこの段階で自分が負った障害で体の機能が失われたことを激しく悔やみ、絶望感に満ちあふれ、そのことにほとんどの時間がA費やされてしまう悲壮な時間帯で、多くの人が多くの時間を悶々とした日々として送っている。次の次元で初めて社会環境に目が移り、社会に対する不満や不安、怒りなどを感じ、同時に自分が少し何かができ出し、それに喜びを感じたりする。そして、最上部の実存的次元では、障害を負った自分の役割や自分の将来について展望を語れるようになる、そんなニュアンスのことが書かれてありました。

## 神様の所業

私は何度もその資料を読み返しました。そして、読み返しているうちに「人間」という摩訶不思議な生き物の中にあつて、きっとまだほかの大事なものに目を向けていかなければいけないだろうかとずっと私が思い続けていた疑念への大きなヒントをオそこからもらえたかのように思え始めていました。B率直なところ私はまだ、今の自分が障害の世界での立ち位置をどこに置けばいいのか十分とらえられずにいました。受傷後のあの地獄の苦しさのC渦中はなんとか脱出したものの、そしてすべての価値観を変えることによって社会に対する私の気持ちも整理でき、日常の生活や将来に対する展望についても組み立てが少しずつながらできつつあったものの、しかし、なぜかまだ頭の中の引き出しからこぼれ落ちたものが収まるべき場所がわからず、いくつか転がり落ちているような中途半端な気がしてなりませんでした。そしていま、その散らばったものを拾い集め、やっと引き出しに収めることができそうな気がしています。そしてさらに、資料にあった実存的次元の先には、また違う次元があるのでないか、そして、それは描いた展望を具体的に現実化しさらにその質を高めることによ

り成し得るような気がしています。

リハビリで身体的な機能が上がり、それが自分への自信となり障害の受容を感じる方も大勢いるだろうし、また一方で私のように重度の障害を負い、身体的な機能の回復からの人生に対する自信は得られなくても価値観を変えたり、精神的な**D充足感**で（カ）を感じたりすることができのかもしれない。また、たとえその両方が同時に満たされなくても、どちらか一方だけでも、それらは得られるのではないか、身体的な機能が回復するとかしないとか、考えてみれば、それは自分の人生に対する「希望」とはまったく別問題なので、その資料を読んでいて強く、そう感じました。

（池ノ上 寛太「リハビリの結果と責任」絶望につぐ絶望、そして再生へ」平成二十一年）

問一 AからDまでの傍線の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 aからdまでの傍線ーのカタカナを漢字に直しなさい。

問三 本文冒頭の見出しは以後の本文のキーワードとなっているが、（ア）に入る言葉を本文中から抜き出しなさい。

問四 傍線ーイを具体的に示している一文を見つけ、その最初の八字を抜き出しなさい。

問五 傍線―ウの質問に対し、筆者は以下の文で質問への答えを話したが、その内容をまとめた文の①～③に入る言葉を考えて書きなさい。

( ① )とまでは言えないが、自分が( ② )していた人間的な感情を大切にしたり、自分のために( ③ )を使うことで精神的な解放感を感じることができた。

問六 傍線―エの状態を説明している箇所を見つけ、三十五字以内で書き抜きなさい。

問七 傍線―オが指している物を書きなさい。

問八 (カ)に入る言葉を考えて書きなさい。



